

川口 潤¹: 三内丸山遺跡の集落変遷史Jun Kawaguchi¹: A history of the Jomon village reconstructed
at the Sannai-maruyama site, Aomori Prefecture

要旨 青森市の三内丸山遺跡の発掘調査で明らかになった縄文時代前期中葉から中期末葉までの集落は、縄文時代前期中葉の第I期(円筒下層a・b式期)から中期末葉の第VI期(大木10式併行期)の6つの段階を経た。このうち、集落の規模がもっとも大きかったのは中期中葉の第IV期(円筒上層c・d・e式期)であった。

キーワード: 円筒土器文化, 縄文集落, 縄文前期, 縄文中期

Abstract The Sannai-maruyama village reconstructed from the excavation of the Sannai-maruyama site, Aomori Prefecture, changed from stage I in the middle phase of the early Jomon period (lower Entoh-a, b pottery types) to stage VI in the termination of the middle Jomon period (Daigi-10 pottery type). Stage IV in the middle phase of the middle Jomon period (upper Entoh-c, d, and e pottery types) was the maximum stage of the village.

Key words: early Jomon period, Entoh pottery culture, Jomon village, middle Jomon period

はじめに

三内丸山遺跡は青森市の南西約4 km、青森市三内字丸山の標高約20 mの台地上に位置する。縄文時代前期中葉から中期末葉にかけての遺跡で、円筒下層a式から大木10式併行期までの遺構、遺物が確認されている。遺跡の北側には沖館川が東流し、青森駅付近で陸奥湾に注ぐが、その流域には後述するように三内丸山遺跡と重なる時期の遺跡が多数分布する。

本稿では、三内丸山遺跡の調査の概要とこれまでの発掘調査で明らかになった縄文時代前期中葉から中期末葉の集落の変遷を概観し、また、周辺域に分布する遺跡をも総合して、三内丸山遺跡との関係や集落の位置づけを行ってみたい。

三内丸山遺跡におけるこれまでの調査

三内の地から土器や土偶が出土することは菅江真澄らによりすでに江戸時代から記録が残されている。1920年代、1940年代にも資料紹介がなされているが、本格的な調査は1953年の慶応義塾大学や地元医師成田彦栄らの調査を嚆矢とする。この調査は学術調査として1955年の第二次、1956年の第三次、1958年の第四次に受け継がれた。

1960年代以降は開発に先立つ緊急調査が多くなり、1967年、1987年には青森市教育委員会が、1976年には青森県教育委員会が発掘調査を実施している。運動公園

建設に伴う1976年の調査では、併走する2列の土坑墓列が検出され、縄文時代の墓制・社会を考える上で貴重な情報が得られた。なお、一連の運動公園建設関連の調査では、隣接する近野遺跡で大型住居跡も検出されている。

その後、運動公園拡張に伴い、三内丸山(2)遺跡内に野球場が建設されることとなった。1992年から始まった野球場建設に先立つ緊急調査では、縄文時代前期中葉から中期末葉にかけての遺構、遺物が大量に出土した。盛土遺構、大型住居などの特殊な遺構、木製品、漆器、骨角器などの有機質の道具、魚骨、動物骨、植物遺体など当時の生活や環境を知る資料も多数得られ、直径1 m前後の木柱も複数出土するに至った。市民の間でも遺跡保存に対する機運がしだいに盛り上がり、青森県は遺跡の重要性を考慮し、1994年に野球場建設の中止と遺跡の保存、活用を決定した。この間、青森市教育委員会により遺跡内を貫く都市計画道路建設に伴う調査も実施されたが、その道路もルートが変更されることとなった。1992年、1993年には送電線の鉄塔移設に伴う調査も青森県教育委員会により行われている。注目されるのは、野球場建設予定地北側の沖館川に面した台地縁辺部の第6鉄塔地区である。わずか169 m²の調査にもかかわらず、夥しい数の遺物が出土した。有機質遺物も多く、自然科学的な分析も多角的に行われている。分析結果は報告書に詳しい(青森県教育庁文化課、1998)。

¹ 〒030-8540 青森市新町2-3-1 青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財グループ

Cultural Properties Protection Division, Aomori Prefectural Board of Education, 2-3-1 Shin-machi, Aomori 030-8540, Japan

保存決定後、青森県教育委員会は遺跡の全体像解明に向けて1995年から学術調査を継続し、2004年度までに28次にわたる調査を行っている。当初は史跡指定に向けた範囲確認が優先され、1997年には同史跡、2000年には国特別史跡に指定された。史跡指定地には従来の三内丸山(2)遺跡、三内丸山(1)遺跡、小三内遺跡、近野遺跡の一部が含まれているが、現在ではそれらの遺跡が一体のものとして統合されて三内丸山遺跡となっている。それに伴い、1976年の調査で検出された近野遺跡の大型住居跡は、登録上、三内丸山遺跡の近野地区のものということとなった。遺跡の範囲は約35ha、その内指定範囲は24.3haである。

なお、三内丸山の名を冠した遺跡には他に三内丸山(3)～(6)遺跡が、類似した遺跡名には三内遺跡、三内霊園遺跡、三内沢部遺跡などがあり、しばしば三内丸山遺跡と混同されるが、それらは別遺跡である。

出土遺物については1958点が2003年に国の重要文化財に指定されている。この指定は報告書刊行済みのものを対象としたため、現段階での指定品は竪穴住居跡出土品と第6鉄塔地区出土品が中心である。

三内丸山遺跡の集落変遷

三内丸山遺跡は縄文時代前期中葉から中期末葉に至るまでの集落跡であるが、その間、集落規模は一定だったわけではない。発掘調査の概要報告では6期に区分した変遷史が示され(岡田, 1996)、その後刊行された『青森県史別編』においても同様の6期区分が示されている(岡田, 2002)。本稿ではそれらをベースに、近年の学術調査の成果も踏まえて、三内丸山遺跡の集落変遷史を再整理することとする。

第Ⅰ期 縄文時代前期中葉(円筒下層a・b式期)

集落の出現期として位置づけられる。遺構の種類としては竪穴住居、大型住居、土坑墓、埋設土器、貯蔵穴、捨て場、道路跡などが見られる。

この時期を特徴づけるのはいわゆる「捨て場」で、沖館川に面した斜面部や沖館川に開口する「北の谷」に形成されている。「北の谷」には杭列で土留めされた道路跡も確認されている。鉄塔建設のために調査された「第6鉄塔地区」は沖館川に面した斜面部の一角169m²を調査したものであるが、大量の土器、石器とともに、動物骨や植物遺体も検出されている。

住居は「北の谷」の西側に分布するが、この地区は縄文中期の北盛土と重複している。北盛土は保存されているため、その下位にある縄文前期の遺構の数や詳細は明確ではない。大型住居は台地中央付近に出現する。土坑墓は南斜面に分布するようであるが、保存された南盛土の下位にあるため、詳細は不明である。子供の墓と考えられる埋設土

器は住居域の北側から台地の縁にかけて密集する。

この段階から住居域、墓域、捨て場の土地利用の区分が見られる。

第Ⅱ期 縄文時代前期後葉(円筒下層c・d式期)

確認される遺構の種類は第Ⅰ期と同様であり、土地利用のあり方も第Ⅰ期を踏襲するが、集落規模は拡大傾向にある。

捨て場は「北の谷」やその開口部から「第6鉄塔地区」にかけての沖館川に面した斜面部に大規模に形成され、さらに西側に延びる。第Ⅰ期に見られた「北の谷」の道路跡についてはすでに機能していない可能性が高い。住居は「北の谷」の西側から台地中央部の平坦部にかけて分布するが、北盛土や縄文中期の遺構との重複のため明確に把握できない部分がある。大型住居は「北の谷」の東側にも1棟確認されている。土坑墓は「北の谷」の東側や谷頭を中心に分布する。土坑墓は縄文中期になると列をなして東に延びるようになるが、列状墓の形成はこの頃から始まった可能性が高い。埋設土器は住居域北側に分布する。貯蔵穴は住居付近に点在するようである。

第Ⅲ期 縄文時代中期前葉(円筒上層a・b式期)

集落規模は第Ⅱ期からさらに拡大する。遺構の種類は、住居、土坑墓、埋設土器、貯蔵穴などの他に、盛土遺構、掘立柱建物が加わる。

住居は第Ⅱ期同様「北の谷」の西側から台地中央の平坦部に分布するが、さらに南斜面にも作られるようになる。大型住居は台地中央付近に構築される。土坑墓は2列となり東側に延びる。列の間は道路と考えられている。埋設土器は住居の北側から台地の縁にかけて密集する。貯蔵穴は「北の谷」の東側にまとまった分布が見られる。盛土遺構は3ヶ所で確認されており、形成時期はほぼ同じ頃のものである。それぞれ「北盛土」、「南盛土」、「西盛土」と呼んでいる。ヒスイ製大珠や土偶など祭祀にかかわる可能性のある遺物の多くはこれら盛土遺構から出土している。掘立柱建物は台地中央部、南盛土西側で確認され、複数軒が同時存在した可能性もある。巨木を使った大型掘立柱建物も台地の北西側に出現する。

第Ⅳ期 縄文時代中期中葉(円筒上層c・d・e式期)

集落はさらに拡大し、各期を通じて最大規模となる。遺構の種類は第Ⅲ期とほぼ同様であるが、数が増え、分布範囲も広がる。新たな遺構としては環状配石墓が出現する。

住居は第Ⅲ期の分布域に加えて南地区全域、近野地区北側にも分布する。住居数は各期を通じて最多となるが、大部分は長軸4m以下の小型のものである。大型住居は台

地中央に構築される。列状をなす土坑墓は継続して造られ、東側の列状墓の延長は420 mにも及ぶことがわかった。西側でも列状をなす土坑墓が造られ、平行する道路が南に延びる。環状配石墓が作られ始めるのもこの頃と推定される。埋設土器は第Ⅲ期とほぼ同じ地区に密集する。貯蔵穴は大型化し集落の最も外側の斜面に集中して造られる。盛土については、北、南、西の各盛土とも大型化する。掘立柱建物の分布域は第Ⅲ期とほぼ同じである。

第Ⅴ期 縄文時代中期後葉（榎林・最花時期）

遺構の種類は第Ⅳ期とほぼ同様である。住居は「北の谷」の西側から台地中央の平坦部、南斜面の他に南地区、近野地区北側にも分布し、大型住居は台地中央の他に近野地区にも構築される。土坑墓は引き続き造られるものの、埋設土器の子供の墓としての利用は不明確となる。環状配石墓は多数作られ、集落南西部で列状に連なる。道路は環状配石墓と平行するようである。北、南、西の盛土遺構は引き続き形成されるが、第Ⅳ期に比べると土量、遺物量は減少する。遺跡内に復元された最大規模の大型住居や掘立柱建物の元となった遺構はこの頃のものとして推定されているが、他の掘立柱建物は小型化し住居の近くに分布する。粘土採掘穴は「北の谷」の東側と南斜面に作られ、貯蔵穴は大型化し南地区の斜面にも作られる。

第Ⅵ期 縄文時代中期末葉（大木10式併行期）

集落は主に北地区北西側に展開するが、集落規模は縮小し、施設配置の規則性も不明確となる。遺構の種類も少なくなり、住居跡、土坑、埋設土器は見られるが、盛土遺構や大型住居、掘立柱建物などは構築されなくなる。

住居跡は復元された台地中央西側付近にまとまりを見せるが、沖館川に面した斜面部でも確認されている。

以上のように、これまでの調査により三内丸山遺跡のおおよその広がりが把握され、集落規模は縄文時代中期中葉がピークであることが明らかとなっている。また、明確な遺構が構築された最終段階は中期末葉の大木10式併行期であることも把握されている。ただ、集落の始まりの時期については未解明な点が残されている。三内丸山遺跡では重層的に遺構・遺物が出土する地点が多く、盛土遺構や「北の谷」など、遺構、遺物保存のため、あえて上位の遺構を完掘しなかった区域も少なくないからである。縄文時代前期の遺構確認はこうした制約のもとでなされているせいもあってか円筒下層a式期の住居跡の数は他型式よりも少ないが、谷などの遺物の出土状況から判断すると円筒土器文化初頭の同型式期にはすでに集落内での活発な活動があったことは確かである。

周辺の遺跡とその変遷

三内丸山遺跡の眼下を流れる沖館川流域には多数の遺跡が分布し、三内丸山遺跡と時期的に重なる遺跡も少なくない。前後する時期も含めて、三内丸山遺跡を取り巻く周辺の遺跡の状況を沖館川流域の遺跡で概観してみる。

縄文時代早期から前期前半の様相

三内丸山遺跡に集落が形成される以前の時期は、周辺部においても明確な集落の存在は確認されていない。ただ、三内沢部(1)遺跡、近野遺跡、熊沢遺跡、三内丸山(6)遺跡、岩渡小谷(4)遺跡などでは縄文時代早期の遺物が確認されている。前期前半の遺物については、少ないながらも三内沢部(1)遺跡、熊沢遺跡で出土している。

縄文時代前期中葉から末期の様相

三内丸山遺跡に集落が形成される前期中葉から末期までの時期については、対岸の三内沢部(1)遺跡、上流域の熊沢遺跡、岩渡小谷(4)遺跡においても集落が形成されている。熊沢遺跡は三内丸山遺跡付近からさらに2.5 kmほど上流に遡った沖館川左岸に位置し、青森県教育委員会と青森市教育委員会が発掘調査を行い、捨て場から大量の遺物を検出している。岩渡小谷(4)遺跡は熊沢遺跡の対岸の遺跡で青森県教育委員会により発掘調査が行われている。縄文時代前期中葉から後葉にかけての集落内に開析した小谷から、掘り棒、舟形容器などの良好な木製品や木組み遺構が検出されている。自然科学的分析もなされており、三内丸山遺跡の前半期と重なる時期のデータが興味深い(青森県埋蔵文化財調査センター、2004)。

縄文時代中期前葉から中葉の様相

三内丸山遺跡の集落が拡大し、最大規模となる中期前葉から中葉にかけての集落は、三内沢部(1)遺跡、三内丸山(6)遺跡、近野遺跡にも見られる。三内丸山(6)遺跡では竪穴住居跡の他に掘立柱建物跡や多数のフラスコ状土坑が検出され、近野遺跡では掘立柱建物が環状に巡る様子が確認されている。

縄文時代中期後葉から末葉の様相

三内丸山遺跡の集落が縮小に向かう中期後葉から末葉にかけての集落は三内沢部(1)遺跡などで確認されている。土器片敷き炬や複式炬の使用など、土器以外においても大木系の影響が認められている。

縄文時代後期の様相

三内丸山遺跡に明確な遺構が確認されなくなる後期は、周辺において遺構を確認することができる遺跡は限られ

たものとなるものの、遺物自体は三内丸山遺跡も含め多くの遺跡から出土している。三内丸山遺跡と境を接して隣り合う三内丸山(5)遺跡や近野遺跡、南東に約1.5 km離れた三内丸山(6)遺跡からは良好な資料が得られており、三内丸山(5)遺跡からは近年の調査で後期初頭の上器棺が3基出土し、近野遺跡からはこれまでの調査で後期の土偶や土器が多数出土している。三内丸山(6)遺跡では比較的まとまった遺構、遺物が検出されており、熊の意匠を用いた土製品、石皿、土器も出土している。

まとめ

三内丸山遺跡の変遷を周辺の遺跡も含めて簡単にまとめると以下ようになる。

三内丸山遺跡に集落が営まれる以前の縄文時代前期前半の時期、沖館川流域においては熊沢遺跡や三内沢部(1)遺跡で遺物の散布は認められるものの、明確な集落が確認されるには至っていない。前期中葉の円筒土器文化の始まりとともに、三内丸山遺跡、熊沢遺跡、岩渡小谷(4)遺跡などで集落が形成されるようになる。中期になると三内丸山遺跡はさらに拡大傾向を見せるのに対し、熊沢遺跡や岩渡小谷(4)遺跡では逆に遺構、遺物とも大幅に減少し、代わって前期の集落が明確ではなかった近野遺跡や三内丸山(6)遺跡などに集落が見られるようになる。中期後半、三内丸山遺跡の集落は縮小するが、他の集落も同様に縮小傾向にあるようである。後期になると三内丸山遺跡に明確な遺構は見られなくなるが、南に隣接する三内丸山(5)遺跡や近野遺跡、三内丸山(6)遺跡からは良好な遺構、遺物が確認されている。

このようにみると、沖館川流域では円筒土器文化の始まりとともにある程度の規模の集落が形成され、下層式期に多くの遺構、遺物を残しながらも上層式期にはそれらが少なくなる遺跡と、逆に、下層式期の遺構、遺物は少ない

ながらも上層式期に増加に転じる遺跡があることがわかる。そうした中であって、三内丸山遺跡は円筒下層a式から大木10式併行期に至るまでの遺構、遺物が連続と確認されている。各時期の他遺跡と比較しても三内丸山遺跡の規模は大きく、当時の人々にとっても三内丸山遺跡が特別の場所であったことが窺える。後期になると三内丸山遺跡から遺構は見られなくなるが、遺物の分布状況から当時の人々の行動範囲の中には入っていた可能性は考えられる。隣接する三内丸山(5)遺跡や近野遺跡、やや離れた三内丸山(6)遺跡では良好な遺構、遺物を残しているの、周辺部まで含めて考えると三内丸山遺跡周辺は後期に至っても縄文人の生活の場であったことがわかる。

一方、円筒土器文化が始まる直前段階の様子は周辺部まで含めてもなかなか見えてこない。前期前半の遺物は若干の遺物が散布する程度で、いまだ集落の確認には至っていない。現状から判断すると、沖館川流域では円筒土器文化の開始とともに本格的な集落の形成が始まるようである。その背景がいかなるものであるかは詳らかではないが、追求すべき課題の一つと思われる。

引用文献

- 青森県教育委員会, 1998, 三内丸山遺跡 IX (第2分冊) (青森県埋蔵文化財調査報告書第249集), 210 pp, 青森県教育委員会, 青森.
- 青森県埋蔵文化財調査センター, 2004, 自然科学分析, 「岩渡小谷(4)遺跡II (青森県埋蔵文化財調査報告書第371集)」, 203-331, 青森県埋蔵文化財調査センター, 青森.
- 岡田康博, 1996, 集落の概要と変遷, 「三内丸山遺跡VI (青森県埋蔵文化財調査報告書第205集)」, 103-107, 青森県埋蔵文化財調査センター, 青森.
- 岡田康博, 2002, ムラのうつりかわり, 「青森県史別編三内丸山遺跡」, 51-57, 青森県, 青森.

(2005年9月17日受理)